

かきばらくまのこかまあと
1. 柿原能子窯跡

所在地：あわら市柿原

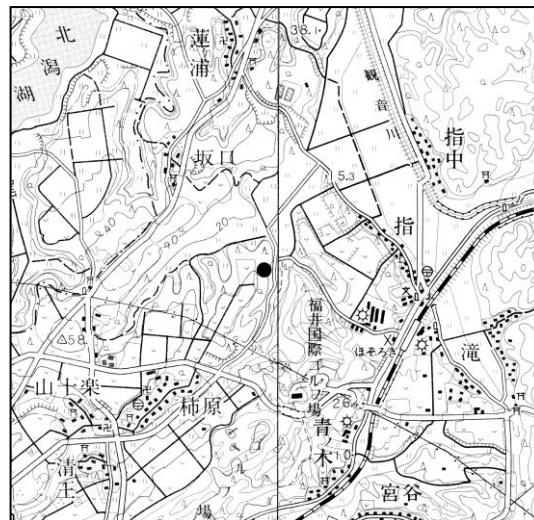
調査原因：北陸新幹線建設事業

調査期間：平成29年5月1日～11月30日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：1,000 m²

時代：奈良・平安時代



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 柿原能子窯跡は、8世紀前半から9世紀にかけて操業した金津西窯跡群の柿原支群に属し、加越台地東方にある標高20～30mの低丘陵上に所在しています。調査地は柿原能子窯跡が展開する丘陵の最も北側に位置する谷部とその周囲の丘陵斜面で、北陸新幹線建設事業に伴い発掘調査を行いました。同じ丘陵の最も南側にある谷部とその周辺では、平成3年から4年にかけて旧金津町教育委員会が発掘調査を行っており、8世紀代の須恵器窯5基、木炭窯1基を検出しています。

遺構 須恵器窯4基(2～5号窯)、木炭窯4基(1・6～8号窯)、土坑20基、ピット約230基などを検出しました。窯跡は、谷奥に8基が並列しており、南側の4基が木炭窯、北側の4基が須恵器窯でした。

須恵器窯のうち、最も南に存在する5号窯は、木炭窯である1号窯の北側に隣接しており、土層の観察から1号窯より古い時期のものと考えられます。5号窯の北側には4号窯、3号窯、2号窯が約2mずつの等間隔で並んでおり、谷の奥側にある5号窯から谷の入口側にある2号窯に向かって順次作られたことがわかりました。時期は8世紀後半から9世紀前半と考えられます。

4基の須恵器窯はすべて斜面に沿って作られています。3～5号窯では地面を掘り抜いて作った天井が部分的に残っており、2・4号窯では焚口付近の両側に覆屋のものと考えられる柱穴が存在していました。また4号窯では、燃料を燃やした燃焼部と須恵器を並べて焼いた焼成部との境に直径数cmの芯材を穿った痕跡が認められました。こうしたことから、須恵器窯は、焚口から燃料を燃やした燃焼部には仮設の天井をかけ、須恵器を焼いた焼成部から煙を出した排煙口までは地面をトンネル状に掘り抜いて作ったと考えられます。

いずれの窯も調査区外にのびるため、排煙口を検出していないものの、床面の傾斜が緩いことから直立する長い煙道をもつ可能性が高いと推測されます。須恵器を並べた焼成室の高さは1.2～1.3m前後とみられ、床面最大幅は2・4・5号窯が1.5mで、3号窯は他の窯と比べてやや狭く、1.2mを測ります。2・4・5号窯は、最後に操業した時の床面の大半と、側壁の一部または全体が人為的に剥がされており、3号窯のみ全面にわたって最後に操業した時の床面が残っていました。3～5号窯では、焼成部の床面に、楕円形の土坑が掘り込ま

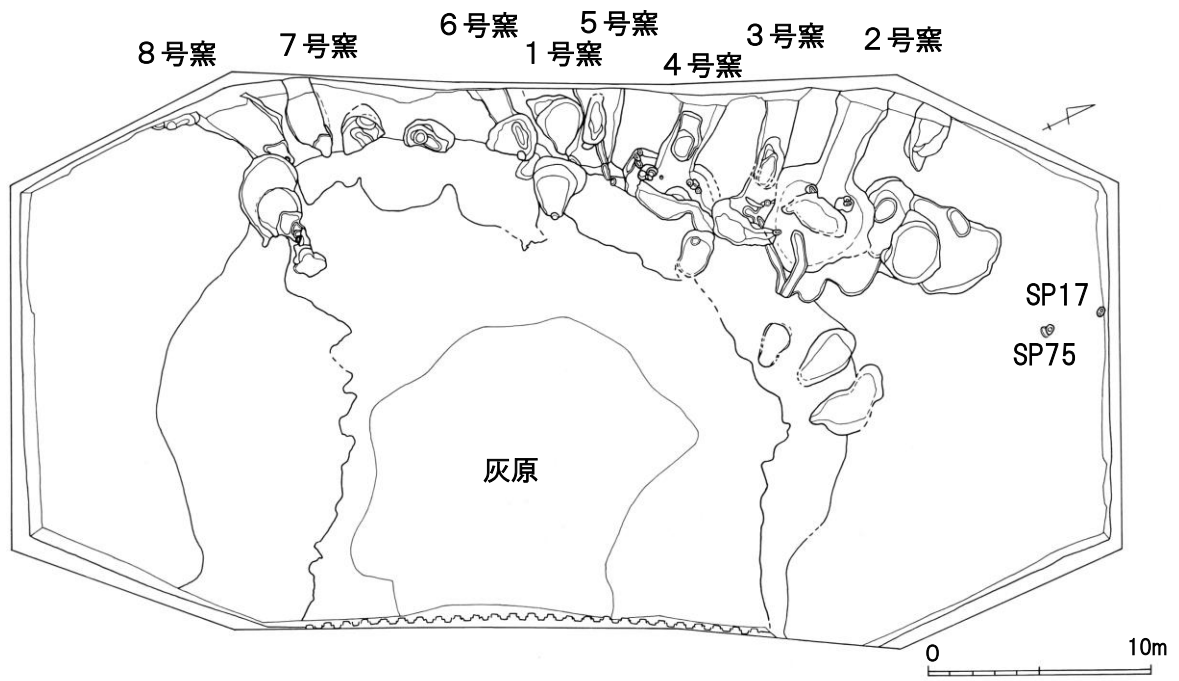
れていました。側壁や天井(窯内部)には短く切った藁を混ぜたものを貼り付けており、その際の指の跡が明瞭に残っていました。側壁は複数枚確認しており、完形に近い須恵器の蓋などが補修に使われた痕跡も認められました。また、2号窯では、側壁に長辺0.1~0.3mを測る四角柱状の窯壁が再利用されていました。窯の前庭部は、2号窯が楕円形の土坑状、3・4号窯は山裾側が半月形の土坑状に窪んでいました。2・3・5号窯の前庭部から山裾に向かっては排水溝が設けられており、それぞれの窯の山裾側には直径1m程度で底面が平坦な土坑を伴っていました。

炭窯は、1・6号窯と7・8号窯の各2基が近接して存在していますが、6号窯と7号窯は土坑2基を挟んで約8m離れています。7・8号窯は焚口も並列していることから、同時操業の可能性も考えられます。また、6~8号窯はいずれも山裾側に土坑を伴っていますが、8号窯のものは底面が階段状を呈しており、通路としての役割も担っていたようです。1号窯については前庭部を確認したのみのため不明ですが、6~8号窯は斜面をトンネル状に掘り抜いて作られたと考えられます。床面は平坦なものが多く、その最大幅は6号窯が1.2m、7・8号窯が1.5mを測ります。また、8号窯では、炭を作った焼成部の中央あたりでトンネル状の排煙口1基を確認したほか、原位置を保っていないものの燃焼部の左側壁際で閉塞材とみられる面取りした立石が出土しました。

遺物 遺物はテンバコ400箱にのぼり、このうちの約7割は灰原から出土したものです。大半は須恵器ですが、一部土師器なども含まれています。このうち、特筆されるものとして、SP17とSP75で出土した須恵質の相輪があげられます。相輪とは仏塔の上部を飾る装飾で、SP17には上から順に、水煙、受花と伏鉢が合体したもの、九輪が、1個体ずつ納められました。このうち、水煙は長頸瓶、九輪は台付盤といった既存の器種を作り替えたような形をしており、特徴的です。また、SP75からは宝珠と竜車が合体したもの1点のみが出土しました。九輪については9点で一揃いであるため完全ではないものの、相輪を構成する部品が上から下まで揃って出土したのは県内では初めてのことです。

まとめ 出土した相輪の各々の部品には、ひび割れや欠損、他の個体の付着などがみられ、失敗品と考えられます。こうした相輪を含む瓦塔は全国各地の須恵器窯でも出土していますが、当遺跡のように、それだけを穴に納めている例は今のところ確認できていません。廃棄の際に掘った穴は長軸が0.4~0.6mとさほど大きなものではありませんが、相輪だけに手間をかけていることを考えると、職人のこれらに対する畏敬の念が想像されます。また当遺跡での相輪の発見は、その供給先など地域の歴史に関する新たな問題を提起するものにもなりました。

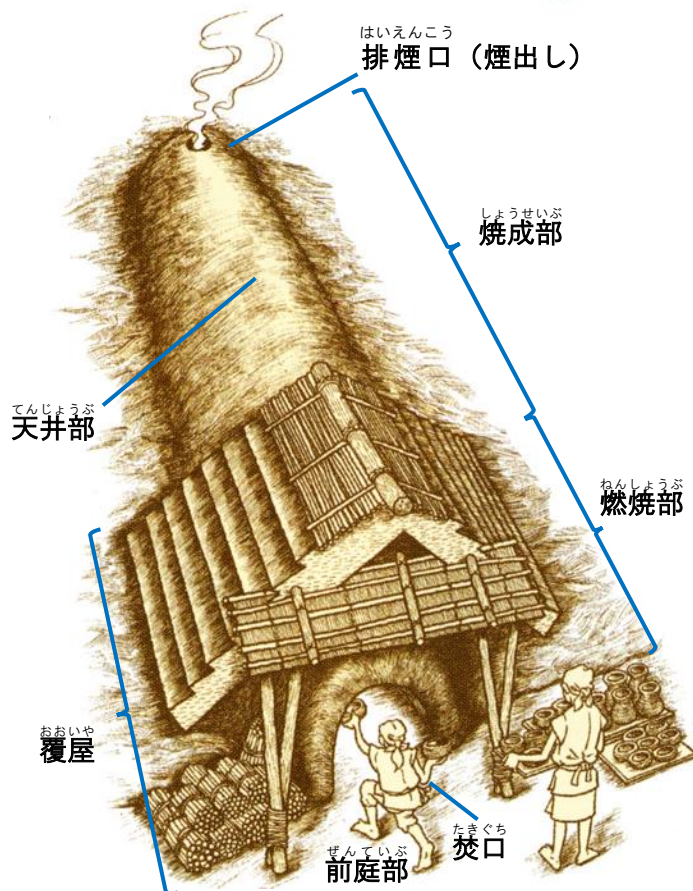
今回の調査では、須恵器窯4基と木炭窯4基のほか、大量の遺物を検出しました。調査地周辺には製鉄遺跡も多数確認されており、それらとの関係を含めた地域の手工業生産を考える上でも貴重な成果を提供するものとなりました。(藤本聡子)



遺構概略図



調査区全景(南東から)



窯の部位名称

『島根県立古代出雲歴史博物館展示ガイド』に加筆



SP75 遺物出土状況 (西から)



SP17 遺物出土状況 (南西から)



瓦塔の部位名称

(東京都宅部山遺跡出土瓦塔複製)



SP17 と SP75 から出土した相輪